



December
2017

No. **46**

東京音大ジャーナル46号
<http://www.tokyo-ondai.ac.jp>

〈特集1〉新キャンパス 第28回 緑の環境プラン大賞 2
「おもてなしの庭」部門 大賞受賞

〈特集2〉創立111周年記念オペラ公演「La Bohème」 4

〈TCMで学ぶ音楽の魅力〉弦楽アンサンブル 6

打楽器に魅せられて 7

作曲指揮専攻「合同レッスン」 8

作曲「ソングライティングコース」 9

挑戦するTCMの在学生・卒業生 10

〈シリーズ〉TCMから世界へ 14

〈シリーズ〉教員紹介 15

TCMならではの夏の合宿 16

TCM NEWS / TOPICS 18



中目黒・代官山新キャンパス

第28回 緑の環境プラン大賞 「おもてなしの庭」部門

大賞受賞

テーマは

「まちと協奏するみどりの中の音楽大学」

■「おもてなしの庭」とは

公益財団法人都市緑化機構主催の「緑の環境プラン大賞」は、1990年に開催された「国際花と緑の博覧会」の理念を踏まえて創設されたもの。今年は第28回を迎え、みどり豊かな都市環境で育まれる人と自然とのふれあいや、コミュニティ醸成等の実現に資する緑化プランを選出し、その実現を助成しています。

「おもてなしの庭」部門は、2015年から2020年に向けた特別企画。エリアは東京都内限定で、「花と緑で観光客を迎える」「おもてなしの活動」に関する

るアイデアを盛り込んだプランが対象です。昨年度は「日比谷公園おもてなしのバラ園」が受賞し、回を追うごとに注目度が高まっています。

今年度は、応募書類による一次審査に東京音楽大学を含めた3案が通過。9月25日に二次審査が実施され、10月17日、2019年4月開校予定の本学、中目黒・代官山キャンパスの大賞受賞が決定しました。12月4日、明治記念館（東京都港区）にて国土交通大臣をはじめ関係各位臨席のもと表彰式が催され、本学の鈴木勝利理事長に表彰状が授与されました。



「都市の緑三賞表彰式」2017年12月4日(月) 明治記念館

■花とみどりと音楽で
人々をおもてなし。
地域に愛される
キャンパスを目指す

今回本学は、新キャンパスの全体テーマ「まちと協奏するみどりの中の音楽大学」のもと、代官山と中目黒の両エリアを結ぶ旧鎌倉街道（目切坂）である、「みどりの鎌倉街道」を応募対象範囲にしました。源頼朝が開いた幕府へ通じる鎌倉街道と、武蔵野の森の再生に着目し、長年にわたり地域から愛され続けてきた樹木の保存・移植・挿木により遺伝子継承した桜の新植や、水景の導入により、街と街を結ぶみどり豊かな鎌倉街道として現代に蘇らせました。そこでは目黒川の桜との連続性を実現するとともに、都内でありながら、多くの樹木・草花の植樹・植栽計画によって四季折々の風景を楽しむ

目黒区長 青木 英二氏

第28回緑の環境プラン大賞特別企画「おもてなしの庭」部門大賞の受賞、心からお喜び申し上げます。

このたび受賞された「みどりの鎌倉街道」は、旧鎌倉街道である目切坂に沿った東京音楽大学新キャンパスの通路として、武蔵野の杜を再生し地元が大切にしてきた樹木を保存するなど、地域の魅力を高める素晴らしい計画になっていると思います。これから、ここへ通うことになる学生、近隣にお住まいの区民、世界から訪れる多くの方々に、地域の歴史と文化を携えた「おもてなしの庭」として、

ことができるでしょう。そして、それらみどりとそこに集まる四季折々の昆虫や鳥等の生物たちからのおもてなしに加え、東京音楽大学ならではの音楽文化の発信は地域コミュニティを形成し、音楽が街全体にあふれます。「音楽」と「みどり」「生物」が一体となり、そこを訪れる人々を手厚くおもてなしするのです。

今回の本学のプランでは、「都心にも関わらず豊かな自然を創造し、その中で音楽教育により人を育成する」という、今までにない斬新なアプローチであること、「音楽を中心に地域交流を図るエリアマネジメントが秀逸であること」が高い評価を受けました。そしてそこには、「竣工後は新キャンパス全体を利用して、東京音楽大学が地元と共に周辺地域を盛り上げてほしい」、そんな熱い想いが込められています。

未永く安らぎと親しみの持てる場所になっていくことを期待しています。

現在、平成31年4月の開校に向け建設が進む新キャンパスの計画では、みどりの鎌倉街道を含め、オーケストラ広場や音楽ホールなどが開放されることで、地域交流や回遊性が高まります。また、区民向けの音楽教育や音楽イベントの開催など、音楽大学の特徴を生かしたさまざまな取組が始まるうとしています。目黒区といたしまして、新キャンパスのコンセプトである「まちと協奏する」音楽大学と連携・協力しながら、大学と区民が共に学び合い、皆が響き合えるまちづくりに取り組む所存です。

東京音楽大学創立111周年記念オペラ公演

ラ・ボエーム

「La Bohème」

2017年10月21日(土)・22日(日)
東京音楽大学A館100周年記念ホール

Minoru Nojima
学長 野島稔

東京音楽大学111周年企画の第一幕である、今回のオペラ公演。栗國淳先生の演出、広上淳一先生の指揮、そしてもちろん熱のこもった声楽の先生方の歌唱指導による舞台は、まさに「総合芸術」であり、本学の総合力の象徴だったと思います。

以前、マリア・カラスが初めてジュリアード音楽院の学生を指導するときに、ニューヨーク・タイムズのインタビューを受けて、「音楽において我われは皆学生です」と語っています。いつでも音楽の真実を追求し続けるその姿勢に、私はとても感銘を受けたものです。そして、教員、学生の音楽への情熱が集束した今回の公演に、私は強いエネルギーを感じました。

本学は今、新たな未来に向かって歩み出しています。その舞台においても、すべての本学関係者が熱いスピリットを共有し、一つのゴールを目指して学び続けていくことを願っています。



■ソリスト

ミミ役(10月22日)
遠藤紗千さん

声楽 大学院2年
静岡県立清水南高等学校卒業

これまでブッチーニの作品には、なかなかなじめず敬遠しがちでしたが、今回の栗國淳先生の演出を通じて、ミミはかわいさを売りにするあざとい女性ではなく、仲間たちを思いやることを知り、彼女やブッチーニに対してストリートな好感を抱くようになりました。自分が思っていたミミよりも、栗國先生が導いてくださった彼女のキャラクターのほうが私はずっと好きだったんです。また、指揮やコレペティートルといったさまざまな先生方から、自分が気づいていなかった数多くの課題を与えられ、それらをつずつ消化していくことはとても有意義なことでした。その結果、作曲家からのメッセージを読み取れるようになった気がします。

私は一度社会に出てから本学大学院に進みました。本来、卒業後は一人で学ぶべきことを、本学で多くの先生方から享受で

きたことを、心から幸せに思っています。

ロドルフォ役10月22日)

吉田 一貴さん

声楽 大学院2年
呉港高等学校卒業

全幕を通じて演じるのは初めての経験だったので、オペラの難しさを実感したと同時に、自分は「歌い、演技することが本当に大好きなのだ」と改めて思いました。以前は「まず声が第一」と考えていましたが、実際に全幕通して舞台に立ってみると、作品への自分なりの解釈に基づく演技表現がいかに重要なのか、

壮大な複合芸術としてのオペラの存在とその意味を、身をもって学ぶことができました。当初はロドルフォのミミへの「愛」をなかなか表現できなかった私は、「オペラで何を見せるのか?」悩み考える日々でしたが、夏の稽古の頃から「愛が見えるようになった」と栗國先生から言われた時のうれしさは忘れられません。

本学ではあらゆる方面の先生方から、まさに手厚く指導されます。その恵まれすぎる環境に甘んじず、音楽を自ら積極的に追求するスタンスを、今後も続けていきたいと思っています。

■コンサートミストレス

金子 英梨歌さん

ヴァイオリン 大学4年
玉川聖学院高等学校卒業

私にとってオペラの演奏は初めて。登場人物が同世代の芸術家たちでもあり、作品は理解しやすかったとはいえ、オーケストラの演奏にキャストの歌と演技が加わると、音楽の「間」が変わり、同じシーンでも別組のキャストだと、さらにそれは微妙に変化します。歌手の方々が表現しようとしていることを探りながら、その調整に戸惑い苦労しましたが、数多くのことを学んだ、とてもいい経験となりました。

広上淳一先生は一人ひとり、すべての演奏者の存在と気持ちを考えた上で指揮されていると実感しました。演奏メンバー全員が、再びオペラに挑戦したいと切望していると思います。

■副指揮者

浅野 将己さん

指揮 研究員
2016年大学卒業
学習院高等学校卒業

西口 彰浩さん

指揮 大学院1年
栃木県立鹿沼高等学校卒業

指揮科の学生は、声楽専攻の方々とかかわり、ましてはオーケストラ伴奏によるオペラ作品を学ぶ機会は少なく、演技や



言語要素が加わる作品の演奏に参加したことで、ワンステップ上がった実感を抱いています。

あまり認知されていない「副指揮」の存在。舞台の袖で振り、決して客席からは見えず、カーテンコールにも並ばない黒子ですが、稽古時は「可能な限り立ち会い、テンポや演出上のきつかけなど、すべてを把握」し、本番時は「歌手やバンドが『陰』で歌い演奏する際、モニターで表のオーケストラの演奏を確認しながら、それとシンクロするように袖で指揮する」など、その役割は多岐にわたります。常に広上淳一先生が創り上げる音楽に溶け込み、先生の意図を理解し、陰の部分を引き継がなければいけません。そこにメインキャストや合唱団、オーケストラやバンド、演出家や各スタッフ等、総勢100人以上の意志

■合唱

森山 綾子さん

声楽演奏家コース 4年
日本大学第三高等学校卒業

ソリストを目指している自分にとって、大学院の先輩方と一緒にの舞台に立ち、オーケストラに合わせて演じることの楽しさと難しさを経験し、自分の課題と目標を見いだせたことに感謝しています。社会人講座の受講生の方々の表現もとても参考になり、演技が苦手な私は、当初は合唱の複数の役をこなすことに困惑しましたが、自分の考えで演技し、それを評価していただくことで、少し自信もつきました。学生時代から本格的なオペラを学び、現場の空気に接することができなのは、本学ならではの魅力。何かと多忙になる学部4年次ではありましたが、「参加できて本当に良かった!」と、今実感しています。



(左から)山崎泰寛さん(大学4年)、吉永優香さん(大学3年)、菅原淳教授、高瀬真吾さん(2015年大学卒業)、石田湧次さん(大学4年)

打楽器に魅せられて

人類と共に歴史を歩んできた「打楽器」。シンプルな構造だからこそ、奏者の幅広い表現力が要求される奥深い楽器です。日々その音を追求する皆さんに、打楽器の魅力を伺いました。

菅原 淳 教授

Akushi Sugahara

新たな打楽器の魅力に出会う

本学打楽器科では、入学試験時にティンパニ・小太鼓・マリンバのいずれかで受験しますが、入学後はそれらに縛られることはありません。学生たちは打楽器の種類にかかわらず、自由に選択することができ、そこには、在学中に新たな魅力に出会う可能性をはらんでいます。こうしたフレキシビリティは本学打楽器科の大きな特徴でしょう。加えて、学生全員がオーケストラでの演奏を経験して卒業することも、極めて有意義なことだと自負しています。

学生たちは、実ののびのびと音楽を楽しみ、私たちの助言以上に自ら研鑽を積み重ね、卒業するまでの4年間で驚くほど成長していきます。現在、多くの卒業生たちがヨーロッパでも活躍しており、その繊細な演奏と日本人のみが表現できる音の「間」は、今後も高く評価されることでしょう。しかし、彼らは皆、入学前に基礎を身につけていたからこそ、本学が擁する財産を糧に自分の音を表現する喜びを知るようになりました。今後本学で打楽器を専攻される皆さんにも、まずはカテゴリーにとらわれず多くの音楽と接し、基本的な演奏技能をしっかりと固めていただきたいと思います。

弦楽アンサンブル

「アンサンブル・エンドレス」



東京音楽大学111周年記念演奏会 東京音楽大学 弦楽アンサンブル 第27回演奏会
2017年10月7日(土) 東京音楽大学A館100周年記念ホール

1990年に授業の一環として結成された「アンサンブル・エンドレス」。本学器楽専攻弦楽器の教授・講師陣が指揮・指導にあたり、その演奏会は、毎年高い評価を得ています。今年度の演奏会には総勢33名の学生と助演1名が参加し、弦楽器が奏でる華麗な音色が、満席のお客さまを魅了しました。

大谷 康子 教授

Yasuko Ohnani

演奏する喜びと共に
音楽の素晴らしさを実感する

私はこれまで長年にわたり、東京音楽大学の学生たちを指導してきましたが、伝統ある「アンサンブル・エンドレス」に携わるのは初めてのことでした。今回、日々音楽と真摯に向き合い研鑽し続ける、本学の学生たちの可能性を最大限引き出すプログラムを考えることは、私にとってもとても楽しく、貴重な経験でもありました。

選曲にあたっては、「音楽・演奏の本質とは何か?」「聴く人の心を動かす演奏をするにはどうしたらいいのか?」ということをや、まず念頭におきました。その結果、これまでのアンサンブル・エンドレスの演奏会では合奏作品が主体でしたが、今回は、前半の部では「学生の演奏個性

を生かしたソロを含む作品」、後半では、そうした「演奏者一人ひとりの感性と演奏能力を結集した、合奏の醍醐味」を披露させていただきました。

また、アンサンブル・エンドレスはあくまでも授業の一環です。練習を積み重ねていくにあたっては、学生たちが「自ら積極的に探究し学んでいく姿勢」を身につけ、「表現することを心から楽しむ」ことで音楽の素晴らしさを実感しながら、「将来音楽家として生きていく上で何が必要なのか?」、その点に気づいていただけるようにすることを、常に目指してきました。

演奏会終了後、学生たちの「アンサンブル・エンドレスに参加して、表現する喜びを実際に体感することができ、演奏に対する意識が変わった」という言葉を聞き、その目的は達成できたと思っています。

アンサンブルは、音楽を奏でる時にだけあてはまる概念では決してありません。その意味を知り実践することは、人間社会全体にも通ずることです。この授業を履修した学生たちのみならず、今回の演奏会で学生たちの演奏に耳を傾けていただいた皆さまにも、「自主的な表現を各々持ちながら調和して一つのものを創造する」素晴らしさにお気づきになり、その深遠なる意味をご理解いただけたら、心から幸せに思います。

INTERVIEW

高瀬 真吾さん

2015年大学卒業 埼玉県立浦和高等学校卒業

音楽は対話。アンサンブルではベクトルを示して他の奏者を導き、ソロでは自分の想いをダイレクトに伝えられるのが打楽器の醍醐味です。誰もが出せるその「音」を「音楽」にするには、「どのような音で演奏するのか考える」ことが重要だと菅原淳先生に教わりました。それは個々の楽器特性を知らなければ不可能です。本学ではさまざまな打楽器を学べ、著名な演奏家による数多くのマスタークラスを経験できることが魅力です。

吉永 優香さん

大学3年 千葉県立東葛飾高等学校卒業

1年次の「オーケストラスタディ」では、打楽器の役割を、基本的な楽曲を通じて理解できました。そのため、2年次以降



バイエルン放送響首席ティンパニ奏者
レモン・カープス氏による「ティンパニ 公開レッスン」
2017年10月4日(水)
東京音楽大学A館100周年記念ホール



授業の様子

曲者が意図するメッセージに対するイメージや感情といった、奏者一人ひとりの音楽性に基づく演奏が有機的に絡み合い、お互いを大いに触発し合っており、その演奏は初めて珠玉のアンサンブルとして光り輝き始め、統一感のあるいきいきとした音楽となるのです。

アンサンブルは、音楽を奏でる時にだけあてはまる概念では決してありません。その意味を知り実践することは、人間社会全体にも通ずることです。この授業を履修した学生たちのみならず、今回の演奏会で学生たちの演奏に耳を傾けていただいた皆さまにも、「自主的な表現を各々持ちながら調和して一つのものを創造する」素晴らしさにお気づきになり、その深遠なる意味をご理解いただけたら、心から幸せに思います。

石田 湧次さん

大学4年 愛媛県立松山西中等教育学校卒業

望み努力すれば、数多くのチャンスを得られるのが本学です。課題を一つひとつ習得することは、将来の方向性を見いださせてくれ、そこからまた新たなチャンスが芽生えます。音楽療法にも打楽器が多用されるように、人間にとって最も身近で直接的に心に響く打楽器。反省することとは多々ありますが、修正して再チャレンジできる環境が東京音楽大学にはあるんです。

山崎 泰寛さん

大学4年 徳島県立富岡高等学校卒業

打楽器の素材は皮・金属・木と多岐にわたるため、バリエーション豊かな音質で表現でき、奏者も聴き手も楽しめる楽器だと思っています。東京音楽大学は先生や先輩方との交流が活発な環境です。打楽器専用の部屋では複数の学生たちが一緒に練習し、先輩や仲間の演奏を見聞きしながら自然とアドヴァイスを受けられるため、とても刺激的な日々を送っています。

作曲指揮専攻「合同レッスン」

「音楽の探求を通じて人間として成長してほしい」と願う、本学の精神の象徴の一つが「合同レッスン」。その門戸は広く開かれ、参加者は音楽を学び、人間を知り、己を見つめます。



ボリス・ベルキン 指揮(ヴァイオリン)公開レッスン 10月3日(火)～5日(木) 東京音楽大学B500

Junichi Hirokumi 広上 淳一 教授



さらなる「進化」のために

「合同レッスン」の延長という位置づけで、ボリス・ベルキン先生のマスタークラスを3日間にわたり開催しました。私にとって同先生は、公私共に貴重なアドヴァイスをいただく友人です。今も現役を貫き通す、世界的なヴァイオリニストが有する至宝を、専攻の垣根を越えて分け合い、共有させていただくことがその目的でした。

「全楽団員の想いと感性で音楽を築き上げるのがオーケストラ。ソリストや指揮者が偉いわけではなく、その一員であることに誇りを持つてほしい」と先生はおっしゃいます。世界中のオーケストラや数多くの巨匠と共演し、音楽と共に人生を歩み続ける演奏家の叡智と姿勢には、指揮科の諸君たちも、器楽専攻の学生も、大いに学ぶべきことがあったでしょう。そこで参加者全員が何かを掴もうとする真摯な姿に、私は本学の進化を感じ

ました。そして、今後もさらなる進化を遂げるためにも、音楽を通じ人間として学ぶ「合同レッスン」の真意を、本学の方々全員に考えていただきたいと、今、切に願っています。

受講生 INTERVIEW

福田 ひろみさん

ヴァイオリン 大学院2年
兵庫県立御影高等学校卒業

先生の音楽には「みずみずしい生命」を感じます。魂がこもったその音を聴くと、さまざまな情景がじんわりと浮かんてくるんです。先生の「コンクールでの結果はゴールではない。その後、自分がどのような音楽家になり、何を伝えたいのか試行し続けることが重要」という言葉。私もいつかその真意がわかるようになりたいと思います。

伊藤 万桜さん

ヴァイオリン 大学院科目等履修生1年
東京都立芸術高等学校卒業

憧れのベルキン先生の演奏に間近で接することができて本当に幸せに思います。生涯忘れられない感動でした。これまでも多くのマスタークラスを受講していますが、だいぶ後になつてからその時の音を聴き返してみると、自分自身が成長できたからか、その時々の先生の言葉の本当の意味がわかりとても参考になるんです。

渡邊 栞さん

ヴァイオリン 大学院科目等履修生2年
東京音楽大学付属高等学校卒業

今回初めて先生の演奏に直接触れさせていただき、楽曲内のテンポや流れを重視されている点が大変勉強になりました。西洋音楽にはそれが生まれた国の言葉の抑揚や発音の影響が必ずあり、私たち日本人には馴染みのない流れがある場合があります。そうした意味でも海外の先生のご指導を仰げたことは素晴らしい体験でした。

コンサートミストレス

金子 英梨歌さん

ヴァイオリン 大学4年
玉川聖学院高等部卒業

先生が弾かれる音にも、語られる言葉にも、力強さを感じました。そしてそこには深い優しさもあります。そのどちらにも先生が歩まれた歴史の重みが、メッセージとなつて伝わってくるのです。楽譜上の演奏記号を表面的になぞるのではなく、曲の場面にあった音を自分のイメージと共に奏でることを、改めて教えていただきました。



作曲「ソングライティングコース」

誰にでも、一生心の中に残る歌があるでしょう。それは私たちを感動させ、励まし、癒してくれます。そんな人々を動かす曲作りを、「音楽業界の今に触れながら学ぶ」コースをご紹介します。

Ken Kawamura 川村 ケン 客員教授



ポピュラー音楽の作曲には、独特の音楽理論に裏付けされる秘訣があり、それらをこのコースでシステムチックに習得し、自ら壁を乗り越えられるようになってほしいと、私たちは考えています。

授業は少数精鋭で進められ、学生たちは週1曲、4年間で100曲単位の作品を仕上げます。一人で作詞・作曲し、DTMでプリプロダクション作品として仕上げ、さらにはセルフプロデュースの方法まで習得します。

また、本学には弦楽器、管楽器、打楽器の生音がいつも集まっています。コンピュータの環境も毎年刷新され、プロの現場で必要とされるソフト音源もそのつど活用できます。「学生が最新スペックのDAWで作った曲が大学では聴くことができない」となどということはありません。



これも本コースの大きな魅力でしょう。

原石を磨き上げる

入学時は原石で構いません。自分が求める曲のイメージがあればよいのです。私たちは課題を与えるだけではなく、作曲へのアプローチを学生一人ひとりとディスカッションし、「個」に合った方法で磨いています。そうすればこそ、原石はそれぞれ独自の色彩で光り輝くようになるのです。

私は長年ミュージシャンとしてステージに立ち、観客の拍手や盛り上がりを感じてきたため、「売れる」多くの人に支持さ

卒業生 INTERVIEW

Koshio Ishikawa 石川 晃士郎さん

作曲「ソングライティングコース」
2017年大学卒業
啓明学園高等学校卒業

主役は一人ひとりの「感性」 私は入学以前から、歌手、役者として活動していました。しかし、単にそれらを器用にこなすだけではなく確固たるバックボーンを築きたいと願い、「歌を作れる人間」を目指し、ソングライティングコースに進みました。

本コースの狙いは「いいメロディを書く」こと。その主役は学生一人ひとりの「感性」です。楽理を体系的に学び論理的なアプローチで作曲するのではなく、自



卒業後の活動領域は「作曲」「作詞」「アレンジ」と広がります。それらの相互関係を学んだからこそ、コライト作品の場合でも他者の役割と重要性を理解でき、より大きな感動に導くことができますと今感じています。自分に生じた感動を少しずつ高揚させていく学びが、このコースには詰まっています。



写真:毎日新聞社提供

Profile

文化庁新進芸術家在外研修員、明治安田文化財団海外音楽研修生としてミュンヘンとウィーンにて研修。日伊声楽コンクール第3位、国際コンクール「新しい声」アジア代表など多数受賞。市川倫子、橘洋子の各氏に師事。

初心を思い返し、心から楽しんで歌う
初挑戦の日本音楽コンクール、「今の自分のベストを尽くす」ことを念頭に臨みました。緊張をうまくコントロールしきれなかった二次予選では新たな課題も見つかり、自分の未熟さを改めて痛感したため、ファイナリストに選出された際には、驚きと嬉しさが込み上げました。
大学院修了後、さまざまな経験を積んできましたが、憧れのコンクールへの緊張は大きく、ひたすら励むが故、私は「音楽を楽しむ」ことを忘れかけていたようです。そんな折、音楽を愛し信じる先生方の姿に触れさせていただき、「音楽の力

とその素晴らしさを多くの人に伝えたい」と願った初心を思い返しました。
音楽は人を感動させ現実から離れることも、現実を深く考えることも可能にしてくれます。ファイナルの舞台では、マエストロとオーケストラのすてきな音色に導かれ、心から音を楽しみ歌うことができました。演奏後、皆さまから大きな拍手と声援をいただき、それまでのことが走馬灯のように思い浮かび、「この瞬間に出会えて本当に良かった」と感極まりました。これを新たなスタートに今後も精進を重ね、唯一無二の声という楽器を磨き続けたいと思います。

第86回日本音楽コンクール

声楽部門第1位

鈴木 玲奈さん

Reina Suzuki

声楽演奏家コース
2011年大学卒業 2013年大学院修了
茨城県立取手松陽高等学校卒業



2017年8月25日(金)に行われた本選

第27回クララ・ハスキル国際ピアノコンクール

優勝

青年批評家賞・聴衆賞・モダンイズム賞(新曲賞)

藤田 真央さん

Mao Fujita

ピアノ演奏家コース・エクセレンス 1年
東京音楽大学付属高等学校卒業



Profile

幼少より国内外での受賞を重ね、国内はもとより世界各地でリサイタル、オーケストラとの共演を行なっている。現在、野島稔、鷺見加寿子、佐藤彦大の各氏に師事。

ルーマニア・ブカレスト出身のピアニスト、クララ・ハスキル。ユダヤ系のため、第二次世界大戦の際、ナチス・ドイツの迫害を逃れスイスに移った彼女の偉功を称え、1963年から半世紀以上も開催されているこのコンクールで認めていただき、とても光栄に思います。開催地はスイス西部の町ヴヴェイ。湖畔に位置する自然豊かな土地で、2週間ほどホームステイしましたが、その家もほとんど自給自足の生活です。とはいえ、予選の土曜日にはマーケットにあふれんばかりの人が集まり、小さな町でしたがとても活気がありました。

海外コンクールならではの障壁

今回は79名のピアニストがノミネート。予選には23名、セミファイナルでは6名が挑戦し、ファイナリストは香港とイタリア出身の21歳のふたりと、参加最年少だった私の3名でした。セミファイナルでの私の演奏順は最後。23時過ぎにスタートし、演奏を終える時計は0時を回っていました。そのような深夜に演奏したことは初めてでしたが、緊張せず楽しみながら、いつもと異なるハイテンションな状態で演奏したように思います。

海外演奏時には、予期せぬさまざまな障壁が現れるものです。今回もファイナルのリハーサルでは、曲のテンポなど指揮者の意図・解釈とずれがあったり、集合時間の変更を知

外村 理紗さん

Risa Hokamura

東京音楽大学付属高等学校 ヴァイオリン 1年

第86回日本音楽コンクール

ヴァイオリン部門第2位

歌う音色を目指して

母がヴァイオリニストで、自宅にはいつもその音が流れていました。私も幼少時から箱と鉛筆で弾くまねをしていたようで、見かねた祖母の提案で3歳からヴァイオリンを習い始めました。日本音楽コンクールは子どもの頃からの憧れです。長丁場なため、「側弯症」の持病を持



写真:毎日新聞社提供

Profile

第66回全日本学生音楽コンクール小学校の部全国大会2位、第70回全日本学生音楽コンクール中学校の部全国大会1位、IMA音楽賞。原田幸一郎、小栗まち絵、小林健次の各氏に師事。本学特別特待奨学生。

ちコレットが手放せない私は、二次予選までで心身共に疲れ切りましたが、三次予選ではリラックスして演奏することを心がけたことが功を奏したかもしれません。歌うことも大好きな私です。アンサンブルや演奏の緩急など、課題もたくさん見つかりましたが、今回のコンクールでヴァイオリンも歌ってくれ、それを審査員の方々に認めていただいたのであればとても光栄です。

中学3年の頃から原田幸一郎先生に師事し、東京音楽大学付属高等学校に進みました。以前から憧れていた先輩の方々が過ごしてきた環境で音楽を学べて、今はとても幸せな毎日。将来は、世界中の方々に癒やせるようなヴァイオリニストを目指したいと願っています。今回は2位に甘んじる結果でしたが、この経験を礎に、今後は国際コンクールにも積極的に挑戦し続けたいと思います。

らず、オーケストラの皆さんとの間に重い空気が流れるなど、決してベストな状態ではありませんでした。無事に乗り越えることができて本当によかったです。また、意思疎通のための語学力の重要性も再認識しました。今回の開催地はフランス語圏です。英語はまったくと言っていいほど使われません。実は受賞発表の際でも、自分が何を受賞したのかすぐには理解できなかったんです。

一音一音を意識して弾く

ファイナルでは『モーツァルトピアノ協奏曲第24番』を弾きました。演奏技巧をアピールできる楽曲ではありません。また渡航前のレッスンで、野島稔先生から「スイスのホールは響かない」と言われていたのですが、実は半信半疑だったんです。ところがコンクール会場は本当にとってもデッドなホールで、今回弾いたピアノも真新しく、まったく鳴りません。魂を込め、一音一音自分が出したい音をいつも以上に強く意識して弾きました。

常日頃、野島先生からは「自分の音を創りなさい。どんなに音数が多い曲でも、すべての音に関して自分が出したい音色や響きを決めて弾くように」とご指導いただきます。今回は成人対象の国際コンクールへの初挑戦でしたが、自分が求め具現化できた音が評価されたことを、今もとてもうれしく思います。



受賞後、審査員長のクリスティアン・ツァハリアス氏と

写真:Celine Michel氏撮影・クララ・ハスキル国際ピアノコンクール事務局提供



Profile

広上淳一、下野竜也、高関健、汐澤安彦の各氏に師事。新日鉄住金文化財団指揮研究員。東京国際コンクールにて入選、聴衆賞。これまで読売日本交響楽団などと共演。



写真：www.sassilive.it

卒業間近、広上淳一先生は「自分の心の中に師を持つように」とおっしゃいました。音楽家、特に指揮者は孤独です。社会に出れば、手取り足取りご指導いただくわけにはいきません。今後己の状況・実力を自ら客観視し、作曲家の意図を表現できるよう努力していきます。そして将来、音楽と疎遠になりがちな子どもたちにも、その素晴らしさを伝えることができたなら、とても幸せに思います。

大学で学んだことを今実感する
入学するまで本格的な指揮法を学んだこともなく、レッスンに必死にしがみついていた私ですが、本学の指揮専攻には、先生方が一丸となって学生を育てる風土があり、学生は希望する先生から自由に指導を受けられます。学部から大学院まで、私は4人の先生方にお世話になりました。また、本学ならではの授業「合同レッスン」では、オーケストラの指揮を経験し、器楽専攻の仲間と共に、人間として生きる上での学びを授かりました。今回のコンクールでは、リハーサルから本番までの過程も重要視されたようです。当初はイタリアのオーケストラの反応に戸惑いましたが、彼らは言葉の壁を乗り越え、私が求める音楽を理解するよう、優しく歩み寄ってくださいました。「合同レッスン」で学んだことの意味が理解できたように思います。



Profile

第39回ビティナ・ピアノコンペティション特級銅賞。第22回コンセル・マロニエ21第1位。播本枝未子、海瀬京子の各氏に師事。



東洋人の感性による演奏を心掛けて
恩師の播本枝未子先生には、私が幼少期に習っていた先生より、中学2年の時にお引き合わせいただきました。先生方に見守られてきたからこそ、今の私があります。ボルツアーノは、有名なブゾーニ国際コンクールが開催されるイタリア北部の街です。昨年より、そこで世界各国の若手ピアニストが集まるピアノフェスティバルが開かれ、本年、私も参加しました。予選ではまずサロンコンサートを開き、その中から3名が選出され、ミケランジェリホールでファイナルが行われます。今年度は世界9か国から26名が参加。強豪のロシア勢もいたため、まさか自分が優勝するとは思いませんでした。私は70分間、6作品を演奏しましたが、そのプログラムには西洋人が東洋的なイメージで作曲した曲目も取り入れ、「日本人である自分の感性をアピールしたい」と考えました。一日でオーケストラとのリハーサルとリサイタルをこなすなど、連日ハードでしたが、私の音楽を熱い喝采で迎えてくださり、とても幸せでした。今回、私の演奏を気に入ってくださいました先生から「ぜひローマに」とお誘いを受け、大学院修了後、留学することを決意しました。播本先生の下で学んだ10年は、私にとってかけがえのない時間でした。今は「諦めずに続けてきて良かった」という想いでいっぱいです。

石崎 真弥奈さん

Mayana Ishizaki

指揮
2009年大学卒業
2011年大学院修了
国立音楽大学附属高等学校卒業

第2回ニーノ・ロータ国際指揮コンクール

ニーノ・ロータ賞（優勝） 特別賞（聴衆賞）



写真：全日本ピアノ指導者協会提供

北海道札幌市出身。第64回全日本学生音楽コンクールピアノ部門中学の部全国大会第1位など受賞多数。現在、武田真理、東誠三、広瀬宣行の各氏、作曲を土田英介氏に師事。

Profile

今回の受賞で、日本各地や海外で演奏する機会をいただきました。そこではソロに限らず、室内楽や協奏曲も演奏する予定です。他の楽器を演奏する方々の呼吸や感覚等から刺激を受け、貪欲に吸収し、それを自分に生かせるよう、これからも謙虚な姿勢で向き合っていきたいです。

Syu Katayama

片山 柊さん

ピアノ演奏家コース・エッセレンス 3年
札幌大谷高等学校卒業

第41回ピティナ・ピアノコンペティション

特級グランプリ 聴衆賞・文部科学大臣賞・スタインウェイ賞

横断的な芸術活動を目指して

振り返ると、小学生の頃から「将来は音楽の道に進もう」と考えていたと思います。今はさまざまな器楽専攻の方々と幅広く交流でき、とても刺激的な毎日です。多種多様な音楽を聴いていた父の影響で、クラシック音楽に固執することは

ありませんが、本学に進んでから、作曲家の意図を緻密に創り込むクラシック音楽が、以前にも増して好きになったかもしれません。

ピティナのコンクールの場合、演奏曲の自由度が高いため、自分が伝えたい音楽を表現しやすかったと思います。しかし、私にとってピアノ演奏は表現する手段の一つ。西洋以外の

音楽や写真等から大いに影響を受けています。そのため、さまざまな表現方法を学び、表現することの根源的な意味を問い、追求したいと考えています。その点、音楽を多岐にわたる角度から学ぶことができる東京音楽大学は、私にとっても魅力的な環境です。



写真：株式会社フォトライフ

兵庫県出身。第34回日本管打楽器コンクール特別大賞演奏会にて東京シティフィルと共演。これまでに打楽器を菅原淳、神谷百子、柴原誠、志田ひとみの各氏に師事。

Profile

私が一番好きな楽器は、打楽器の基音が詰まっている小太鼓です。常に正しいフォームで叩き、自分が求める音が鳴るように心がけています。そして将来は、ソリストというよりはオーケストラや吹奏楽団員として、自分ならではの音色で、聴き手や他の演奏者に何かを感じてもらえるアンサンブルを追求していきたいと思っています。そのため、演奏面はもとより、まずは人間として信頼されるよううならなくてはいいけません。その点でも大きなコンクールに参加することはとても勉強になります。ひとりで表現することの難しさを改めて知ると同時に、特に打楽器の場合は、その運搬やセッティングも私だけではなかなかこなせません。自分が音楽を演奏するにあたって、いかに多くの人たちに支えていただいているのかを実感しました。

Yuka Yoshinaga

吉永 優香さん

打楽器 3年
千葉県立東葛飾高等学校卒業

第34回日本管打楽器コンクール

パーカッション部門第1位 文部科学大臣賞・東京都知事賞

多くの方々に支えられて

このコンクールに挑戦したのは、二次予選で敗退した高校3年生の時以来、今回2回目です。前回からの3年間、このコンクールで評価されることも一つの大きな目標として、日夜練習に励んできました。本選の前日、菅原淳先生にレッ

スンしていただいた際にはダメ出しの連続でしたが、本番では「小柄な私だからこそ出せる音色で表現する」ことに集中しました。結果が出て心からうれしく思っています。

私が一番好きな楽器は、打楽器の基音が詰まっている小太鼓です。常に正しいフォームで叩き、自分が求める音が鳴るように心がけています。

そして将来は、ソリストというよりはオーケストラや吹奏楽団員として、自分ならではの音色で、聴き手や他の演奏者に何かを感じてもらえるアンサンブルを追求していきたいと思っています。そのため、演奏面はもとより、まずは人間として信頼されるよううならなくてはいいけません。その点でも大きなコンクールに参加することはとても勉強になります。ひとりで表現することの難しさを改めて知ると同時に、特に打楽器の場合は、その運搬やセッティングも私だけではなかなかこなせません。自分が音楽を演奏するにあたって、いかに多くの人たちに支えていただいているのかを実感しました。

田母神 夕南さん

Yuna Tamogami

ピアノ 大学院2年
千葉県立松戸国際高等学校卒業

第2回ボルツアーノピアノフェスティバル

第1位 ガーシユウィン賞



©LAKESHORE MUSIC

Profile

リスト音楽院卒業、東京音楽大学大学院音楽研究科(修士課程)修了。国内外16の国際コンクールで優勝・入賞。東京音楽コンクール、秋吉台音楽コンクール、日本木管コンクール、日本音楽コンクールで優勝、副賞多数受賞。ハンガリー芸術賞、青山音楽賞受賞。国内外の主要オーケストラとも協演している。

「人生は音楽を変えていき、
ありのままの気持ちを
表現すれば音楽は再びまた
人生に寄り添う」

器楽専攻
クラリネット

コーン・イシュトヴァーン István Kohán 講師

躊躇、偽りのない演奏表現を
音楽一家に生まれた私は、父親の手ほどきで8歳からクラリネットを始めました。ヨーロッパでは子どもの頃から音楽を学ぶシステムが充実しており、音楽大学には、卒業後、すぐに音楽の仕事を始められるように、学部と大学院を合わせた5年間で集中的に教える風土があります。一方日本の場合、大学院や留学など、音楽家として社会に出るまでに時間をかける傾向があり、卒業後の選択肢も多いため、「絶対に音楽家にならなくては」というプレッシャーは少なく、音楽の本質を自由に学べる可能性を秘めています。また私たちは、子どもの頃から常にオリジナリティを求められ続けてきましたが、日本の学生たちには「自分が上手」だという自覚や主張がありません。私はいつも彼らに、「躊躇することは無用。自信を持ち堂々とアピールしてほしい」とアドヴァイスしています。「多少のミスはあっても全身全霊で演奏する音楽」に私は魅力を感じるので。そして、初



恋やファーストキスで誰もが抱くようなエモーションナルな高揚を、自分を偽ることなく表現してこそ、それは成立すると思います。
音楽の本質を感じ取る
今の若い方々はとても熱心に練習されますが、その一方でじっくりと音楽を聴いていないように感じます。インターネット上で表面的に眺めるだけではなく、作曲家の人生を学び、演奏会やCDで人間が奏でる音をじっくり聴き、音楽の本質を感じ取っていただきたいと願っています。
音楽家にとって練習は言うまでもなく、同様にひとりの人間としての人生も大切なものです。人生のさまざまな要素は音楽を変え、それは再びまた皆さんの人生に寄り添っていくことでしょう。そうした意味でも、本学での4年間はとても重要な期間。心を開き、ミスを恐れず自分の気持ちを正直に表現して、音楽を存分に楽しんでいただきたいと思います。



Tomoko Ishige

石毛 智子さん

Profile

東京音楽大学卒業後、フライブルク音楽大学にてベルンハルト・ヴルフ氏、宮崎泰二郎氏に師事。留学中、フライブルク歌劇場オーケストラで研鑽を積む。2013年より、フィルハーモニア・ゴジョフスカ(ポーランド)で3年半にわたり、首席ティンパニストを務め、現在、マインツ・フィルハーモニー管弦楽団(ドイツ)副首席ティンパニスト兼打楽器奏者。

打楽器奏者

打楽器

2010年大学卒業

2011年科目等履修生終了

銚子市立銚子高等学校卒業



ティンパニストの
醍醐味を知り、
心から音楽を楽しんで
演奏する



TCM から世界へ

きっかけはモーツァルテウム大学の
夏期アカデミー

打楽器との出会いは中学校の吹奏楽部でした。打楽器指導の先生の恩師が東京音楽大学の教員だった縁で本学に進みました。在学中は練習に明け暮れる日々でしたが、ひとりで寡黙に楽器と向き合うというよりは、いつもすぐ横に先輩や同級生がいて、先生方とは別の視点からアドヴァイスを受けていた、とても有意義な毎日。そして、3年次のヨーロッパ演奏旅行への参加や、科目等履修生時にザルツブルク・モーツァルテウム大学の夏期アカデミーに奨学生として参加できたことが大きな転機になりました。一般的に日本人の演奏技能は、「優れているが自分をさらけ出さない、機械的な演奏」とよく指摘されます。モーツァルテウム大学では、感じるまま思い思いに演奏する、まだ10代の学生たちの技術が伴わずとも表現力豊かな音を聴き、大いに刺激を受けたものです。私もぜひヨーロッパで勉強したいと願い、本学の方々から紹介されたレッスンで宮崎泰二郎先生と出会い、フライブルク音楽大学に留学しました。

オーケストラ全体を
コントロールする

こちらのオーケストラ団員同士はとてもフレンドリー。演奏面でも自由で自然体で、皆心から音楽を楽しみながら演奏しているのです。本番で失敗してもおからかです。その一方、ティン

パニストの位置づけは極めて高く、「第二の指揮者」と呼ばれており、私もその自負を持って臨んでいます。私はポーランドのオーケストラでいきなり首席ティンパニストを担ったため、当初は自分には重責すぎると感じていました。しかし演奏を続けていくうちに、「自分がオーケストラ全体をコントロールできる」ことを知り、その醍醐味を享受できるようになりました。ティンパニは、弦楽器等と比べれば音数や出番こそ少ないですが、音の一つひとつがとても重要な意味を擁しています。その一音で弦楽器全体が美しく輝いたり、くすんだりもしてしまうのです。そこが、装飾要素が強い他の打楽器群との違いでしょう。
この地で演奏するようになって、私は性格がオープンになった気がします。今ではここぞという小節が近づくにつれ、次第にワクワクするようにもなりました。皆さんにも、まずは西洋音楽が生まれ培われてきたこの地の空気を存分に吸い込んでいただき、音楽の楽しさをぜひ味わっていただきたいと思います。



写真：Dennis Möbus

TCMならではの 夏の合宿

本学のユニークなプログラムの一つが、夏休み期間中に実施される「合宿」。目的はそれぞれ異なりますが、長野県信濃町に広がる大自然の、澄み渡る空気と豊かな緑に包まれながら真摯に音楽と向き合い、学生たちは皆、新たな自分を見つけます。

参加学生 INTERVIEW

ピアノ合宿

2017年8月28日(月)～31日(木)

平山葵さん

ピアノ演奏家コース 1年
北海道室蘭高等学校卒業

親元を離れてから初めての夏休みの帰省。東京に戻るのが辛かった私は、帰京後すぐにこの合宿に参加できて、精神的にとっても救われました。ピアノ合宿のことは、高校時代から東京音大ジャーナルを読んで知っていたんです。当時から「入学したら参加したい!」と思っていましたが、今回夢が叶いました。ピアノの場合個人レッスンのウェイトが高く、同



ファルカシュ・ガーボル先生のピアノと、コハーン・イシュトヴァーン先生のクラリネットによる室内演奏会も開催

級生や先輩方とじっくり話す機会はなかなかありません。同室だった方も面識はありませんでしたが、じっくり話し合っ

て意気投合し、以来毎日親しくさせていただいています。普段とは異なる先生方からのレッスンもこの合宿のメリットです。私はファルカシュ・ガーボル先生やイシュトヴァーン・コハーン先生のレッスンを受講しました。ヨーロッパの方の曲へのイメージと、それを表現する音色や独特なリズムの取り方など、音楽を新たな側面からとらえるきっかけを掴んだ気がします。

虫の音が聞こえる深夜のピアノの練習や、演奏会での信濃町の方々との触れ合いも刺激的でした。夏休みの最後を満喫した今回のピアノ合宿。機会があれば、ぜひ今後に参加したいと思っています。

榎本朱里さん

ピアノ 1年
八王子学園八王子高等学校卒業

もともと消極的で演奏にも自信がなか



教職課程管弦楽の練習風景

ることが多い方はぜひ履修し、合宿にも参加して、音楽の素晴らしさを再認識されたらいいと思います。私も将来接する子どもたちに、そこで学んだことをぜひ伝えていきたいと思っています。

土手愛理さん

(教職課程吹奏楽 会計係)
ピアノ 2年

福岡県立東筑高等学校卒業

授業の一環としての合宿なので、実はもっと束縛されるかと思っていました。しかし、実際に参加してみると、深夜まで仲間たちと練習したり、緑が深く生い茂る森を散策し、東京では決して見る事ができない満天の星空を先生方と一緒に眺めたり……。とてもいい思い出になりました。管弦楽も吹奏楽も人数が多いため、普段はどうしても同じパートの学生同志の交流がメインになりますが、この合宿では食事や入浴も含めて、すべて団体行動が基本です。そこに先生方も加わりますから、楽団としての団結力がよりいっそう強まっていくのを実感します。友達

った私は、同級生に話しかけることも少なく、以前は一人で行動する毎日で、相談できるような友人もほとんどいませんでした。「自分から動き探し求めなければいけない」と焦り、不安な前期を過ごしましたが、「動けば必ず何かが変わるはず」と決意して参加。そこで本当に多くの友達ができました。音楽への意識が高い同級生にも大いに刺激を受け、「私にはたくさん仲間がいる」と実感できるようになり、今はとても幸せに感じています。ホテルで同室だった方には、以来、私の演奏を聴いてもらい、貴重なアドヴァイスももらっています。

また「森林セラピー」では、芝生の上を裸足で歩き、川のせせらぎの音を聴き、みどりの香りをかいだりと、五感全部で自然を満喫することができました。そのためか、食事もとてもおいしく、私にとってはいいことづくめの4日間。毎日都心で気を張って音楽を勉強しているなか、今回の合宿では心も体ものびのびとリラックスして、いつもと違う自分をゆとりと見つめることができました。



壮大な自然は、自分と音楽を見つめ直す機会を与えてくれる

もあきらかに増え、ピアノ専攻の私は、合宿で親しくなった声楽専攻の方から伴奏を頼まれるようにもなりました。また、合宿に限らず、この授業ではそれまでほとんど無知だった楽器を知るようになります。そして、例えば私にとって管楽器の音を知ることが、自分がピアノを弾く際にとても参考になるものです。

私は会計係なので、通帳を預かることに緊張し、参加者一人ずつ計算して収支を合わせるのにも苦労しますが、この合宿には数多くの学びが凝縮されていると思います。



合宿地、信濃町の子どもたちとの音楽を通じた交流も一生の思い出

オーケストラ合宿

2017年8月31日(木)～9月3日(日)

四戸世紀教授

オーケストラ合宿は、12月のシンフォニーオーケストラ定期演奏会に向けて、「より深い音楽」を創ることを目標にしています。今回は、指揮者の高関健先生にも参加いただき、学生たちは必死に食

教職課程管弦楽・吹奏楽夏期強化合宿

2017年8月27日(日)～30日(水) 3年
8月30日(水)～9月2日(土) 2年



教職課程吹奏楽の練習風景

青山詩音さん

(教職課程吹奏楽 サブインスペクター)
声楽 3年

北海道登別明日中等教育学校卒業

この授業の利点は「視野が広がること」。専門外の楽器をゼロから学ぶため、将来教える生徒たちの「できない気持ち」を知ります。また声楽専攻の私にとって、専門外のファゴットを吹き、その際の息の流れ方を知ることが、歌にもとても参考になります。授業を履修して「人間的にも、音楽的にも自分の視野が広がった」と感じています。

私にとって、今回は2回目の合宿。ここでは演奏面はもちろん、楽器運搬など、運営上のことも数多く学びます。ティンパニなど大きな楽器の搬出入は本当に大変で、自分の専攻楽器ではないため扱い方もわからず、余計に苦労しますが、円

らいついていきました。彼らは、午前・午後・夜と合奏し、その合間も自主練習に励みます。終日の音楽との対峙は徹底的な修正を可能にし、寝食を共にすることは学生同士のコミュニケーションをより深め、豊かなアンサンブルを生み出してくれるのです。また、大自然から感じ学ぶことはとても多いもの。プログラムには、「癒しの森」の散策も組み込まれており、音楽を追求する上で、都会の喧騒を離れ、壮大な景色ときれいな空気に包まれることは、とても素晴らしいことだと思います。最終日の「癒しの森コンサート」では、彼らは自分たちが奏でる音が一回り成長したことを実感しながら、新たな課題を見だし、冬の定期演奏会に向けて新たなスタートを切りました。

私の学生時代には、このような恵まれた機会はありませんでした。本学の学生たちをうらやましく思います。この合宿で彼らが音楽を高める辛さと、目的を達成した充実感を得られたなら、私も幸せに思います。



一つの目標に向かい、昼夜を問わず、全員が集中して音楽に取り組む

第54回芸術祭

2017年11月3日(金祝)〜4日(土)

本年度の芸術祭にも、音楽の素晴らしさを共有する、学内外の仲間が多数集まりました。公式企画「POPIN' BRASS II」では、迫力のブラスサウンドが縦横無尽に鳴り響き、ソリストにドミトリ・フェイギン教授を迎えた「プレミアムオーケストラ」は、3人の大作曲家と巡る200年の旅を奏で、会場は大いに沸きました。模擬店等も盛況で、活気みなぎる2日間となりました。



プレミアムオーケストラ
2017年11月4日(土) 東京音楽大学A館100周年記念ホール



2017年11月11日(土) 東京音楽大学J館スタジオ

〈2017年度〉主な内定企業先

株式会社三井住友銀行	3名	三晃金属工業株式会社	1名	株式会社フォクシー	1名
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	2名	株式会社オープンハウス	2名	株式会社宝塚クリエイティブアーツ	1名
住友生命保険相互会社	1名	株式会社豊島屋	1名	株式会社河合楽器製作所	1名
出光クレジット株式会社	1名	株式会社島忠	1名	島村楽器株式会社	1名
日本郵便株式会社	1名	株式会社そごう・西武	1名	文部科学省	1名
戸田建設株式会社	1名	株式会社ケリングジャパン グッチ デイビジョン	1名	ほか多数	

INFORMATION

サンタ・チェチーリア音楽院との正式提携を締結

本学は、以前から短期留学等で交流のあった、イタリア・ローマのサンタ・チェチーリア音楽院と、2017年11月に正式な提携を締結しました。これにより、学生たちはますます豊かな海外経験を得られるようになるでしょう。

教員免許状取得について

東京音楽大学は、2015年10月1日より明星大学通信教育部と教育業務提携を締結しています。その結果、本学音楽学部で所定の科目を履修した学生は、「中学・高校1種免許状」に加え、「小学校教諭2種免許状」も取得可能です。

福岡音楽教室 開室3周年記念演奏会

2017年10月14日(土)
福岡市健康づくりセンター あいれふホール

3周年を迎えた東京音楽大学福岡音楽教室が記念演奏会を開催し、本学の佐藤彦大講師や在学生の辻彩奈さん(ヴァイオリン2年)、藤田真央さん(ピアノ演奏家コース・エクセレンス1年)、瀬頭薫さん(ピアノ演奏家コース1年)と共に、同教室でピアノを学ぶ児童・生徒6名が演奏しました。



本学の卒業生・在校生とその「音」に触れた小・中・高校生たち

瀬頭薫さん (写真後列一番左)

ピアノ演奏家コース 1年
東京音楽大学付属高等学校卒業

今回、素晴らしい先生・先輩方と地元のステージに立て、とてもうれしく思います。東京から離れていると演奏会は少なく、著名な先生ともなかなか出会えません。私が付属高等学校に入学した時には、まだ本学の福岡音楽教室はありませんでしたが、地方で音楽を学ぶ方々は、福岡に限らず本学のネットワークを積極的に利用されると、学びは深まり新たなチャンスも芽生えると思います。

社会人講座

「声楽・合唱」講座 「合唱」講座

音楽は一生学び楽しむもの。本学では、音楽と共に豊かな人生を送るための、社会人講座を設けています。本年7月に開講した声楽の講座では、歌劇「La Bohème」第2幕を教材として伝統ある本学の合唱を学び、その修了発表会が開催されました。また、オーディション合格者は、本学創立111周年記念オペラ公演*にも出演しました。

*本誌P4〜5参照

第16回 東京音楽大学コンクール

2017年11月15日(水) 管打楽器部門／11月16日(木) 弦楽器部門



管打楽器部門 第1位 坂口 璃々己さん

本学主催による、「第16回 東京音楽大学コンクール」の「弦楽器部門」「管打楽器部門」が開催されました。

本コンクールは、学生の演奏意欲の活性化と演奏・表現技術の向上を目的とし、2002年に始められたもの。その大きな特徴は、付属高校生から大学院生まで、学年やコースの枠を越えて誰でも挑戦できることに加え、演奏者・指導者として国内外でご活躍されている、学外の先生方を審査員にお招きしていることです。公平な視点で審査され、先生方から直接講評をいただくことは、挑戦者たちに新たな課題と目標を与えてきました。その結果、これまでの入賞者は、その後も多くのコンクールに入賞するなど、さまざまな場面で活躍しています。

*賞金Ⅰ第1位35万円、第2位10万円、第3位5万円を授与
*2018年には「声楽部門」と「ピアノ部門」を開催予定

■本選結果

【管打楽器部門】

第1位 [マリンバ] 坂口 璃々己(大学3年)
第2位 [オーボエ] 保坂 静伶奈(大学院科目等履修生)
第3位 [ファゴット] 關口 茉那(大学3年)
入 選 [トロンボーン] 佐々木 美桜(大学3年)

【弦楽器部門】

第1位 [ヴァイオリン] 川口 さくら(大学4年)
第2位 [ヴァイオリン] 福田 麻子(大学3年)
第3位 [ヴァイオリン] 和田 泰平(大学院科目等履修生)
入 選 [ヴァイオリン] 大槻 桃斗(大学院科目等履修生)
入 選 [ヴァイオリン] 伊東 香音(付属高等学校3年)



弦楽器部門 第1位 川口 さくらさん

オープンキャンパス

2017年9月23日(土・祝)

本年度のオープンキャンパスが開催され、本学への入学を考える多くの方々を訪れ、活気ある一日となりました。在学生たちによる「ウェルカムコンサート」や「公開レッスン」、「吹奏楽授業見学」等で熱心に耳を傾ける、参加者たちの真剣な姿が印象的でした。



在学生によるウェルカムコンサート



学校説明



声楽公開レッスン



吹奏楽授業見学



個別相談

Concerts 2018

東京音楽大学主催演奏会(予定)

卒業演奏会

4月9日(月) 東京文化会館小ホール

シンフォニック ウインド アンサンブル定期演奏会

7月2日(月) 東京文化会館大ホール

シンフォニック ウインド アンサンブル特別演奏会

7月3日(火) 横浜みなとみらいホール大ホール

ピアノ演奏会～ピアノ演奏家コース成績優秀者による～

7月28日(土) 東京文化会館小ホール

ソロ・室内楽定期演奏会

9月23日(日・祝) 東京音楽大学A館100周年記念ホール

シンフォニーオーケストラ定期演奏会

12月12日(水) 東京芸術劇場コンサートホール

名川・岡村法律事務所創立101周年 東京音楽大学創立111周年 記念特別演奏会

2019年1月10日(木) 東京オペラシティコンサートホール

〔お問い合わせ〕東京音楽大学 演奏課 TEL.03-3982-2496

2018年度

東京音楽大学講習会日程

夏期受験講習会

8月1日(水)～4日(土)

冬期受験講習会

12月24日(月・祝)～27日(木)

入試についてはこちらをご覧ください
<http://www.tokyo-ondai.ac.jp/exam/index.html>



〔お問い合わせ〕東京音楽大学 教務二課 TEL.03-3982-3221

芸術祭 2018年11月3日(土・祝)～4日(日)

2017年、東京音楽大学は創立110周年を迎えました。

本学は、次の新たな100年のスタートとして、2017年5月から2020年3月までの約3年間にわたり、さまざまな「創立111周年記念事業」を展開いたします。